阿佐ヶ谷ワークショップ　講演録

第5回国際シェイクスピア学会東京大会が残したもの

佐々木　隆

目　次

はじめに　2

第５回国際シェイクスピア学会東京大会が残したもの
1　「日本のシェイクスピア」とは　3
2　日本のシェイクスピア研究の国際化　3
3　第５回国際シェイクスピア学会　5
4　第５回国際シェイクスピア学会と私　7
5　シェイクスピア映画研究の発展　9
6　グローカリゼーション時代のシェイクスピアとは　１１
7　日本人のアイデンティティとシェイクスピア　１４

当日の配布資料より　１６

あとがき　２５

はじめに

この講演録は阿佐ヶ谷ワークショップで私自身が話した内容をまとめたものである。阿佐ヶ谷ワークショップは荒井良雄先生がシェイクスピア生誕450年、シェイクスピア没後400年を記念して企画したもので、2014年から開始されたものである。今回、私自身が講演した「第5回国際シェイクスピア学会東京大会が残したもの」(2015年11月21日)のものをまとめた。内容については適宜補足はあるものの、基本的には当日の講演内容である。なお、小見出しはわかり易くするため、新たに設けたものもある。

阿佐ヶ谷ワークショップの主宰者である荒井良雄先生は2015年4月8日に亡くなった。その後は阿佐ヶ谷ワークショップ所長である佐竹徹氏、企画を引き継いだ平辰彦氏の尽力により現在も継続している。2015年11月21日は第1部として川地美子先生の講演「国際学会と日本のシェイクスピア　第1回世界シェイクスピア学会の思い出」、そのあと第2部として私が「第5回国際シェイクスピア学会東京大会が残したもの」として講演した。今回も記録としてまとめることとした。

第５回国際シェイクスピア学会東京大会が残したもの

１　「日本のシェイクスピア」とは

「日本のシェイクスピア」の定義は概ね、次の３つに大別されます。

１）日本国内で実践されたシェイクスピア劇上演、映画、研究等
２）日本人が国内外で実践したシェイクスピア劇上演、映画、研究等
３）おもに日本人が日本で実践したシェイクスピア劇上演、映画、研究等

私自身がこだわるのは「日本人が行うシェイクスピア活動」です。シェイクスピア活動を次の様に定義しておきたいと思います。

シェイクスピアの翻訳、研究、上演（朗読を含む）、さらにシェイクスピア（作品）を創作のヒント（依拠）にした新たな創作作品(映画、音楽、絵画等）を含め、こうした一連の活動を「シェイクスピア活動」(Shakespeare Activities)

「国際化」がテーマにもなりますので、今日の講演では外国人による日本のシェイクスピア研究なども後半で取り上げる予定です。

２　日本のシェイクスピア研究の国際化

日本のシェイクスピア研究の国際化を考える前に日本の国際化、特に英語圏に関する国際化について振り返ってみると、次の様に考えられます。

幕末　外圧による開国
明治　欧米文化の受容

明治時代は受信型のシェイクスピア受容であった。発信ということを考えるならば、川上音二郎・貞奴の海外公演がありますが、注目を浴びたのは『娘道成寺』等の演目であったようです。明治時代のシェイクスピア研究は海外の研究を吸収する時代でした。大正時代はシェイクスピア受容の熟成の期間でした。特に坪内逍遙のシェイクスピア翻訳全集の途中、当時の演劇は近代劇が全盛という時代でした。それでも1916年（大正5）のシェイクスピア没後300年にはシェイクスピアに関するものが多く出版されました。そのいくつかを紹介しておきましょう。

1　『早稲田文学』（沙翁記念号）（第125号）東京堂書店
2　長谷川誠也編『英語世界』（シェイクスピア記念号）（第10巻第5号）博文館
3　齋藤勇『シェイクスピア―彼の生涯及び作物』丁末出版社
4　坪内士行『新譯沙翁警句集』東京毎日新聞社
5　坪内士行『西洋芝居土産』冨山房
6　高安三郎『東西文学比較評論』高安三郎
7　『早稲田学報』（沙翁祭紀念号）（第225号）早稲田大学校友會
8　『芸文』（沙翁号）（第7年第5号）鶏声堂書店

特に3の齋藤勇『シェイクスピア―彼の生涯及び作物』（丁末出版社）は大正時代を代表する日本のシェイクスピア研究書となっています。日本国内のシェイクスピア研究が成熟していくのは坪内逍遙のシェイクスピア全訳後のことで、第一次日本シェイクスピア協会設立（1930）はその象徴的な出来事でした。戦前のシェイクスピア研究で国際化を意識したものは豊田実の *Shakespeare in Japan*（Iwanami Shoten, 1940）です。英文によるシェイクスピア受容史研究という点、さらに戦前の日本におけるシェイクスピア受容史をまとめた基礎文献となっています。英文文献として必ず取り上げられるものです。日本のシェイクスピア研究にとって大きな意味を持つものとして、戦後になって、1961年には日

本シェイクスピア協会が再建され、翌年には学会誌である *Shakespeare Studies* が発行されるようになりました。英文の学会誌の発行です。

世界に目を向けてみると、1971年には第1回のWorld Shakespeare Congressがヴァンクーバーで開催されました。第1部の講演をして戴いた川地美子先生はこの第1回の大会に出席されていた日本人研究者のひとりです。川地美子先生は大山俊一が中心に編集された *Shakespeare Translation* (1974)の発行に関わり、1986年には *Shakespeare Worldwide* と改名されるとともに編集に携わることになりました。この定期刊行物は日本のシェイクスピア受容について翻訳を中心にまとめた英文論文集です。日本でシェイクスピア研究をする以上、翻訳の問題は避けては通れないものです。日本から英文で発信されたシェイクスピア受容に関する英文論文や英文による研究書は決して多くはありません。Niki, Hisae. *Shakespeare Translations in Japanese Culture* (1984)は豊田以来の本格的な日本のシェイクスピア受容を英文で発表した研究書です。中でも私自身が最も注目しているのは黒澤明監督『蜘蛛巣城』(1957)の英文シナリオが収録されたことと、受容史に関する研究論文が収録されていることです。川地美子先生も英語論文 "Shakespeare in Japan"(『杏林大学外国語部紀要』第1号、1989)を発表されています。

The International Shakespeare Association

3　第5回国際シェイクスピア学会

1991年の国際シェイクスピア学会がアジアで初めて、それが東京で開催されました。会場は東京タワー近くの共立薬科大学でした。（現在は、慶應義塾大学）統一テーマは「シェイクスピアと文化的諸伝統」で、シェイクスピアの受容は国や文化により多様化していることを受けて、世界が日本のシェイクスピア

に注目したのです。以降、日本人による日本のシェイクスピア研究が表舞台に登場することになるのです。学会に私も映画部門のセミナーに応募したのですが、力不足で審査を通過することはできませんでした。発表者になることはできませんでしたが、Seminar には出席しました。その時、発表者には日本人はいませんでしたが、そのセミナーでは黒澤明監督のシェイクスピア映画が予想以上に国際大会で注目されていることを知り、驚きました。その時の会場で話題となっていたことは次の２点であったと記憶しています。

1　黒澤明監督の『蜘蛛巣城』と『乱』は日本ではどのように評価されているのか？

2　歌舞伎・能・狂言・文楽とシェイクスピアの演劇的接点は？

黒澤明監督『蜘蛛巣城』(1957)について念のため簡単にご紹介しておきましょう。英語タイトルは *Throne of Blood*。黒澤明が自らシェイクスピアの『マクベス』を日本化（翻案）したことを明言して製作しました。

マクベス　　三船敏郎
マクベス夫人　　山田五十鈴

これまで日本の学会で『マクベス』と『蜘蛛巣城』の比較等が大きく取り上げられることもありませんでした。映画自体がその地位が低かったことや、伝統芸能で歌舞伎・能が上位、狂言が下位といったような取り扱いがあった様子が見られました。日本でのシェイクスピア研究はテキスト研究等が中心であり、上演研究、映画研究が軽んじられていた傾向があったのではないでしょうか。日本で 1991 年以前にシェイクスピア映画を大きく取り上げていたのは荒井良雄先生ぐらいであったと言ってもよいかもしれません。

『シェイクスピア劇上演論』新樹社、1972年
マンヴェル／荒井良雄訳『シェイクスピアと映画』白水社、1974年

40年以上前からシェイクスピア映画に注目していたわけです。さて、セミナーのリーダーをされていたのが、Kenneth S. Rothwell氏でした。このセミナーは8月14日（水）の15:45から開始されたSeminar XVI Shakespeare on Screen World-wide。リーダーのRothwell氏はシェイクスピア映画研究の第一人者です。国際大会が日本で開催されているのに、なぜ発表者に日本人がいないのかと言って会場にいた日本人の顔を見ていたような気がしました。そして、Rothwell氏が会場にいたシェイクスピア研究者に興味深い質問をしました。

1　私は昨日（8月13日）、興味深いシェイクスピア狂言を見たが、この狂言を見たものはいるか。能のシェイクスピアもあったが、この狂言や能は正式なプログラムには入っていないが、どうしてか。
2　会場で配布されていた冊子をもらったが、日本ではシェイクスピア劇がかなり上演されているがようだが、これはどういうものか。

趣旨としてはこのような内容のものであったと思います。なぜ、覚えているかと言えばこの２つの質問に私自身が大きく係っていたからです。ただ、Rothwell氏の質問に当時答えることはできませんでした。あまりにも張り詰めた雰囲気に飲まれたしまったことや、とても発言できるような身分ではないと思いました。また、なぜ発表者に日本人がいないのかという最初に問い掛けのあたりから、いたたまれない気持ちでその会場にしたこともあったのではないかと思います。

もうひとつRothwell氏の発言がその時にあった。それは黒澤明監督『悪い奴ほどよく眠る』(*The Bad Sleep Well*, 1960)もシェイクスピア映

画、『ハムレット』の翻案であると言ったことだ。残念ながら『悪い奴ほどよく眠る』を観ていなかったため、その時にはこの指摘の重要さを理解することはできませんでした。荒井良雄先生も1994年の『キネマ旬報』に「もう一本の黒澤シェイクスピア『悪い奴ほどよく眠る』は現代日本の『ハムレット』？」とした論文を発表され、それを読んで私自身もようやく理解ができるようになった次第です。

4　第5回国際シェイクスピア学会と私

Rothwell氏の2つの質問、8月13日の狂言と冊子については荒井良雄先生が用意していたもので、私自身もここに係ることとなりました。最初の8月13日の狂言について簡単に紹介します。国際シェイクスピア学会の正式プログラムで上演されたのは8月11日にパナソニック・グローブ座で上演されたのは高橋康也作『法螺侍』でした。これは『ウィンザーの陽気な女房たち』を狂言化したものでした。

8月13日には国立能楽堂と国立能楽堂研修舞台で狂言と能の上演がありました。これを企画したのは荒井良雄先生でした。狂言は和泉宗家の和泉元秀脚本・演出『じゃじゃ馬馴らし』、『夏の夜の夢』、『十二夜』。荒井良雄翻案監修の英語狂言『十二夜（恋文）』、『十二夜（黄色の恋）』の他、英語新作小舞を披露されました。能は能シェイクスピア研究会の主宰者の宗片（上田）邦義が『英語能・ハムレット』を演じました。

冊子については荒井良雄先生が所長を務めていた駒澤大学シェイクスピア・インスティテュートが発行する *Shakespeare News from Japan* の年報です。これは1990年に第1号を発行したもので1989年の日本でのシェイクスピア研究書、翻訳、上演等を英文による書誌・上演記録としてまとめたものです。編集主幹は当時駒澤大学教授の石原孝哉、編集は私が担当しました。これは現在も継続しています。

Shakespeare News from Japan については国際シェイクスピア学会では正式なものではありませんしたが、荒井良雄先生のご尽力により共立薬科大学の無人の書店ブースのところに置かせて戴くことになり、無

料で配布しました。Rothwell 氏はその中の 1 冊を手にしたことになります。さらにもうひとつ予想外のことがありました。それは国際大会後の 9 月 11 日付けの手紙が World Shakespeare Bibliography の James Harner 氏から届いたことです。この手紙が届いた経緯は 1991 年 8 月に開催された第 5 回国際シェイクスピア学会に合わせて発行した *Shakespeare News from Japan* を海外から来ていた研究者の方々に学会の会場で無料配布していましたが、考えられることは James Harner 氏自身が会場で本誌を入手したか、あるいはその関係者を経由して手にしたかのどちらかということになります。（手紙は「資料 3　World Shakespeare Bibliography」として巻末に掲示）

手紙の内容によれば World Shakespeare Bibliography 国際委員日本代表として荒井良雄先生と共に私が推薦されてというものです。文面にある *Complete Catalogue of Shakespeare in Japant* とは私が編集した『日本シェイクスピア総覧』（エルピス、1990 年 4 月）のことです。*Shakespeare News from Japan* のデータの基になっているものです。『日本シェイクスピア総覧』(1990)を出版した時に英文による書誌も作成しましょうと勧めてくだっさたのは荒井良雄先生でした。過去のものまですべて英文にするにはあまりにも時間がかかることから、年報形式での発表となりました。結果的に第 5 回国際シェイクスピア学会は私にとって、私自身が研究テーマにしていた日本のシェイクスピア受容研究はシェイクスピア研究の亜流の分野ではなく、はっきりとシェイクスピア研究の一分野として地位を与えられたのではないかと思います。

5　シェイクスピア映画研究の発展

1991 年の第 5 回国際シェイクスピア学会以後、日本で大きく取り上げられるようになった研究分野はシェイクスピア映画、シェイクスピア受容研究、日本独特のシェイクスピア劇上演の研究の 3 つだと私は考えています。ここでは先ほどの Rothwell 氏の指摘を踏まえて、日本のシェイクスピア映画、映像について触れておきたいと思います。

1　『足利合戦』(1919)　詳細不明

※これまでシェイクスピア映画史の中では取り上げられているものの、映像の所在が不明。

2　荒井良平監督『エノケンの豪傑一代男』(1950)

※荒井良雄先生がシェイクスピア映画であるとの指摘をされていますが、現状、国内外のシェイクスピア映画研究では取り上げられていません。私自身は現在、論文としてまとめるために準備中です。

3　黒澤明監督『蜘蛛巣城』(1957)

※1991年以前はシェイクスピア映画研究として取り上げられることはあまりませんでしたが、今ではあちこちで見掛けるところです。

4　黒澤明監督『悪い奴ほどよく眠る』(1960)

※荒井良雄「もう一本の黒澤シェイクスピア『悪い奴ほどよく眠る』は現代日本の『ハムレット』？」(1994)は発表されたものの、日本のシェイクスピア映画研究では黒澤明の3本目のシェイクスピア映画として取り上げられることはいまだに定着していません。原因のひとつには、黒澤明自身が『ハムレット』の翻案映画であることを明言していないからかもしれません。

5　加藤泰監督『炎の城』(1960)

※加藤泰監督自身が日本版『ハムレット』として製作しましたが、「死なないハムレット」ということ、監督自身が失敗作としているためか、シェイクスピア映画として、ほとんど取り上げられていません。海外のシェイクスピア映画研究書には私が知る限りは言及もされていません。前回の講演でご覧いただきましたが、日本版『ハムレット』になっています。現在、私自身が論文を執筆中です。

6　黒澤明監督『乱』(1985)

※日本での封切りの映画評では酷評が多かったように思います。それは映画として。シェイクスピア映画として見ると評価はまた変わるように思います。私自身は第1回東京国際映画祭（渋谷）の英語字幕の上演を観ました。外国人の観客が多かったことを覚えています。

映画ということでなく、映像として見た場合にはTVドラマになったシェイクスピアも紹介しておきたいと思います。映画以外にも、シェイクスピアがテレビドラマ化されているだけに、まさにシェイクスピアの変容振りが社会現象化しているとも言えます。

2007年4月6日には西田敏行・井上真央他出演『王様の心臓～リア王より』、2007年4月7日には滝沢秀明・長澤まさみ他出演『ロミオとジュリエット～すれちがい～』がシェイクスピア・ドラマスペシャルとして日本テレビ系列で放映されました。はっきりとシェイクスピアをベースにしたというものもあれば、『ライオン・キング』(1994)などもプロットをみれば、『ハムレット』の翻案として取り上げている研究もあります。シェイクスピア映画、シェイクスピア映像の研究はまだまだこれからということになるかと思います。

6　グローカリゼーション時代のシェイクスピアとは

1991年の第5回国際シェイクスピア学会を境に日本でもようやく日本人としてシェイクスピアを在り方、つまりシェイクスピア受容について本格的にを捉えようという機運が高まったのではないでしょうか。

私自身は日本人としてのアイデンティティを意識しつつ、受容研究に

取り組んで来ましたが、グローカリゼーション時代を迎えると、シェイスピア事典でも「世界の中のシェイクスピア」のひとつとして「日本のシェイクスピア」を捉える視点が強くなっているように思います。これを客観的に見ようとすると、シェイクスピア事典・辞典の扱いに注目することは強ち無意味ではないと思います。これまでにも「日本」の項目は取り上げられることはありましたが、例えば「Ⅶ　世界のシェイクスピア」という項目が荒井良雄他編『シェイクスピア大事典』(2002)には収録されています。これまでの倉橋健編『シェイクスピア辞典』(1972)、福田恆存監修『シェイクスピアハンドブック』(1987)、高橋康也『シェイクスピア・ハンドブック』(1994)、高橋康也他『研究社シェイクスピア辞典』(2000)には項目立てされていないところです。

『シェイクスピア大事典』(2002)の「Ⅶ　世界の中のシェイクスピア」には以下のように下位項目が設定されています。

§1　概観
§2　英語圏のシェイクスピア
§3　非英語圏のシェイクスピア
　1. ドイツ
　2. フランス
　3. イタリア
　4. スペイン
　5. ロシア
　6. ポーランド他、東欧諸国
　7. 北欧諸国（スカンジナヴィア）
　8. 南アフリカ
　9. インド
　10. 中国
　11. 韓国

この項目ではシェイクスピア研究と上演の現状に情報を提供してくれ

るものを記載しています。日本については「XIV　日本のシェイクスピア」として項目が立てられています。

「概観」としては世界最大の情報提供力を持つアメリカのフォルジャー・シェイクスピア・ライブラリー発行の *Shakespeare Quarterly* の 別冊に World Shakespeare Bibliography として世界中のシェイクスピア情報が掲載されていることが紹介されています。実は、*Shakespeare News from Japan* が注目されるようになったいきさつ等についても掲載されていますので、その部分を紹介したいと思います。

> 1991年8月に、第5回世界シェイクスピア学会が東京で開催されて、日本のシェイクスピア受容に世界が注目するようになった。この画期的な大会を記念して、駒澤大学シェイクスピア・インスティテュートが、『ワールド・シェイクスピア・ビブリオグラフィー』の要請のもとに、年刊の『シェイクスピア・ニューズ・フロム・ジャパン』を発行し、日本のシェイクスピア研究と東京を中心にした上演の情報を世界に向かって発信して以来、『ワールド・シェイクスピア・ビブリオグラフィー』の日本関係の情報は詳しくなり、それはそのままケンブリッジの CD-ROM に転載して記録されるようになった。(498 頁)

この項目を書かれたのは川地美子先生と荒井良雄先生です。国際大会の裏側で起こっていることを知る人はそう多くはありません。今やシェイクスピアは「こうでなければならない」といった固定観念ではなく、その国のシェイクスピアの在り方を認めていこうという方向性に変わってきたのではないでしょうか。その意味でも世界の中のシェイクスピアのひとつとして「日本のシェイクスピア」の有り様もまた、認めらるということになります。また、そのことを発信することがこの時代には必要ではないでしょうか。前回の講演でもグローカリゼーションについて触れていますが、再度、整理しておきたいと思います。国際化、グローバリゼーション、グローカリゼーションへの流れは次のようになります。

1　国際化 (Internationalization)

⇩

2　グローバリゼーション(Globalization)

⇩

3　グローカリゼーション(Glocalization)

第1の「国際化」については外圧（外部からの影響）により国際化するということが前提にあるのではないでしょうか。第2の「グローバリゼーション」は世界中が同じ規格で統一的に進む様相を言及することになります。シェイクスピアの理解や上演は果たしてそうでしょうか。第3の「グローカリゼーション」はGlobalization＋Localizationの概念から生まれた用語で、矛盾する2つの考え方を同時に進めることになります。Think globally, act locally「グローバルに考えよう、ローカルに行動しよう」とよく表現されますが、actを別の意味で考えれば、「グローバルに考えよう、ローカルに演じよう」ということになります。シェイクスピア劇はすでにその国、地域によって自由に上演されています。

7　日本人のアイデンティティとシェイクスピア

シェイクスピア受容を考える時、翻訳は受容におけるバロメーターとも言えます。全訳がなされたということに大きな意味があります。しかも日本には個人による全訳が2種類、坪内逍遙訳と小田島雄志訳がありあす。

日本のシェイクスピア、日本人としてのシェイクスピア、日本独特のシェイクスピアは、研究以外では上演形態や映画等において表現されていますが、1991年の第5回国際シェイクスピア学会以後、日本でもそれがようやくシェイクスピア映画や日本スタイルの上演が研究対象として認められるようになりました。

日本には黒澤明の3本のシェイクスピア映画も2本は日本の伝統芸能

と深いかかわりのあるものです。上演では蜷川幸雄演出の上演でもこうしたものを取り入れています。

明治時代ではこれまでのドラマトゥルギーとは異なる西洋演劇を日本に取り入れるため、その代表としてシェイクスピアに注目した坪内逍遙はその当時の日本で最も受け入れ易い形態でシェイクスピアを翻訳しました。ですから、その台詞に合わせる上演形態のため、翻案調になった時期がありました。その後、日本文化も多様化し、時代と共に変容していくこと、演劇もまた同じような状況になりました。シェイクスピアを日本で受け入れていく場合に、必ずしも欧米のものをそのまま受け入れる必要がなくなってきました。かつては、福田恆存がマイケル・ベートル演出に触発されて日本での翻訳・演出に取り組んだ状況とは異なっているのです。西洋での演出を日本で再現する、あるいは模倣していく時代ではなくなってきたということです。

グローカリゼーションにこだわり、日本人のアイデンティティを考えていくと、日本人が日本文化を根底に物事を考え、表現することはごく自然の成り行きではないでしょうか。日本国内でも標準語、関西弁、東北弁のシェイクスピアの上演があり、ローカリゼーションが進んでいます。方言が注目されているのも、言葉の持つ力がその土地、土地にはあるからではないでしょうか。グローカリゼーションは何も世界に向けるだけではなく、国内についても同様だということです。

以降は、ハンドアウト（資料）を見ながら、補足します。

終了

当日の配布資料より

この資料には当日配布した資料のうち、資料４は書籍等からのコピーのため、その一部を省略し、今回掲載するにあたり、さらに内容を充実させるために、若干の追加情報を加えた。実際に配布した時には分類し、カラー印刷したが、今回の掲載ではモノクロ印刷になっている。

当日の配布資料の表紙

阿佐ヶ谷ワークショップ　　2015年11月21日

第５回国際シェイクスピア学会東京大会が残したもの

発表者：武蔵野学院大学　佐々木隆

本日の内容

1 「日本のシェイクスピア」とは
2 日本のシェイクスピア研究の国際化へ
3 第5回国際シェイクスピア学会
4 グローカリゼーション時代のシェイクスピアとは
5 日本人のアイデンティティとシェイクスピア

ハンドアウトも活用致します

(1)

(1)http://image.search.yahoo.co.jp/search?ei=UTF-8&fr=top_ga1_sadap+%E3%82%B7%E3%82%A7%E3%82%A4%E3%82%AF%E3%82%B0%E3%83%94%E3%82%A2%E7%B4%88%E7%AD%A0#mode%3Ddetail%3Findex%3D0%26ar%3D0

資料目次

資料　1　戦後の英文のよる日本シェイクスピア受容研究・・・

資料１　戦後の英文による日本シェイクスピア受容研究

1929　日本シェイクスピア協会設立

1940　Toyoda, Minoru. *Shakespeare in Japan.* The Iwanami Shoten.

＊豊田実。日本で最初の英文によるシェイクスピア受容研究書。

1960　"Japan" (Campbell, Oscar James and E. Q. Quinn, editors. *The Reader's Encylcopedia of Shakespeare.* Toppan.

1961　日本シェイクスピア協会再建

1962　*Shakespeare Studies.* (The Shakespeare Society of Japan) 創刊

C. Lee Colegrove. "Shakespeare, Chikamtsu and This Tough World" (*Shakespeare Studies*, Vol.2, 1963)

Niki、Hisae. "Kurosawa's *Kumonosujō* A Japanese *Macbeth*" (*Shakespeare Studies*, Vol.7, 1969)

Shakespeare Studies には 1991 年以前で日本のシェイクスピア受容関係の論文は以上の 2 本しか掲載されていません。

1974　*Shakespeare Translation* (*Yushodo Shoten*) 創刊

1984　Niki, Hisae. *Shakespeare Translations in Japanese Culture.* Kenseisha.

1986　Kawachi, Yoshiko, editor. *Shakespeare Worldwide*. (*Shakespeare Translation*. Vol.11 より名称変更) Vol.15 (1995) まで発刊

1989　Kawachi, Yoshiko. "Shakespeare in Japan" (*Kyorin University Review of the Faculty of Foreign Languages.* 1. Kyorin University)

1990　Minamitani, Akimasa. "Hamlet in Japan" (*Japan Quarterly.* XXXVII(2). Asahi Shinbunz)

1991 Sasaki, Takashi, chief editor. *Shakespeare News from Japan.* (Komazawa University Shakespeare Institute) 創刊（現在、2015年でVol.22まで発刊。2014年より発行所がShakespeare News from Japan に変更）

1991 第5回国際シェイクスピア学会東京大会開催

1991 Ueda, Munakata Kuniyoshi. *Hamlet in Noh Style.* Kenkyusha

1994 海外出版 Kishi, Tetsuo, Pringle, Roger, and Wells, Stanley, editors. *Shakespeare and Cultural Traditions.* University of Delaware Press.

1995 Kawachi, Yoshiko. *Shakespeare and Cultural Exchange.* Seibido.

1995 海外出版 Ueno, Yoshiko, editor. *'Hamlet' and Japan.* AMS Press.

1995 海外出版 Takahashi, Yasunari. "Hamlet and Anxiety of Modern Japan" (Wells, Stanley, editor. *Shakespeare Survey.* 48. Cambridge Unviersity Press)

1996 海外出版 Fujita, Minoru and Pronko, Leonard, editors. *Shakespeare East and West.* Japan Library.

1998 Ueda, Munata Kuniyoshi. *Noh Othello In English & Japanese.* Benseisha.

1998 海外出版 Sasayama, Takashi, Mulryen, J. R. and Margret Shewring, editors. *Shakespeare and the Japanese Stage.* Cambridge University Press.

1999 Ishihara, Kosai. "Shakespeare as Japanese Culture" (『外国語論集』第28巻、駒澤大学外国語部)

1999 海外出版 Anzai, Tetsuo, Iwasaki, Soji, Klein, Holger, and Milward, Peter, editors. *Shakespeare in Japan.* The Edwin Mellen Press.

1999 Suematsu Michiko. "Japanese Shakespeare" (*The*

Renaissance Bulletin. 26. The Renaissance Institute.

2000 海外出版 Gurr, Andrew, and Ichikawa, Mariko. *Staging in Shakespeare's Theatre*. Oxford University Press.

2001 海外出版 Minami, Ryuta, Carruthers, Ian, Gillies,John, editors. *Performing Shakespeare in Japan*. Cambridge University Press.

2001 Ueda Kuniyoshi. *Noh Adaptation of Shakespeare: Encounter and Union*. Hokuseido Press.

2002 Jon M. Brokering. "The Intercultural Theatre of Yukio Ninagawa and Tadashi Suzuki" (*Bulletin of the Faculty of Letters*. 47, Hosei University)

2003 海外出版 Kawachi Yoshiko. "Shakespeare in Nineteenth-Century Japan" (Krystyna Kujawinska Courtney and John M. Merder, editors. *The Globalization of Shakespeare in the Nineteeth Century*. Lewinston: The Edwin Mellen Press.

2003 Suematsu, Michiko. "The Cherry Tree and the Lotus: Ninagawa Yukio's Two Macbeths" (『群馬大学社会情報学部研究論集』第 10 号)

2004 海外出版 Schwerin-High, Friederik von. *Shakespeare, Reception and Translation: Germany and Japan*. Continuum

2005 海外出版 Kishi, Tetsuo and Bradshaw, Graham. *Shakespeare in Japan*. Continuum

2005 海外出版 Ashizu, Kaori. "What's Hamlet to Japan?" (http://triggs.djvu.org/global-language.com/ENFOLDED/BIBL/_HamJap.htm)

2006 海外出版 Momose, Izumi. *Japanese Studies in Shakespeare*. Edwin Mellen Press

2006 海外出版 Fujita Minoru and Shapiro, Shapiro, editors.

Transvestism and the Onnagata Traditions in Shakespeare and Kabuki. Global Oriental.

2006 海外出版 Momose, Izumi. *Japanese Studies in Shakespeare.* Edwin Mellen Press

2007 Kawachi Yoshiko. *The World of Shakespeare.* Seibido.

2010 海外出版 Dennis Kennedy and Yong Li Lan. *Shakespeare in Asia.* Cambridge University Press

Daniel Gallimore. "Speaking Shakespeare in Japanese: voicing the foreign"

Minami Ryuta. "Shakespeare for Japanese popular culture: Shojo Manga, Takarazuka and *Twelfth Night*"

Kumiko Hilberdink-Sakamoto. "Shakespeare's villains in Japan"

Suematsu Michiko. "Import/export: Japanizing Shakespeare"

2013 Sasaki, Takashi. "Shakespeare Reception Studies in Japan: A Brief Historical Survey." (『武蔵野学院大学大学院研究ウ紀要』第７輯、武蔵野学院大学)

資料２　国際シェイクスピア学会と世界シェイクスピア学会

バーミングガム大学シェイクスピア・インスティテュート(University of Birmingham Shakespeare Institute, 1951 年創設)
・2 年毎に the International Shakespeare Conference を開催

国際シェイクスピア協会(The International Shakespeare Association)(略語：ISA)
・5 年毎に the World Shakespeare Congress を開催

1971 年　第 1 回　ヴァンクーヴァー
1976 年　第 2 回　ワシントン
1981 年　第 3 回　ストラットフォード・アポン・エイヴォン
1986 年　第 4 回　ベルリン
1991 年　第 5 回　東京　Shakespeare and Cultural Traditions
1996 年　第 6 回　ロサンジェルス Shakespeare and the TwentiethCentury
2001 年　第 7 回　ヴァレンシア　Shakespeare and Mediterranean
2006 年　第 8 回　ブリスベン
2011 年　第 9 回　プラハ　Renaissance / Shakespeare Renaissanes
2016 年　第１０回　ストラットフォード・アポン・エイボン／ロンドン Creating and Re-creating Shakespeare

the International Shakespeare Conference と the World Shakespeare Congress を日本語で訳してしまうと国際シェイクスピア学会（会議)、世界シェイクスピア学会（大会）などと表記されることがある。1991 年の東京大会の場合には第 5 回国際シェイクスピア学会と表記されている。日本シェイクスピア協会編『日本シェイクスピア協会三十年小史』(1993)でも The Fifth World Shakespeare Congress を第 5 回国際シェイクスピア学会と訳しています。明治以降日本では world, international は「世界、国際、万国」など訳語にバラつきがあり、「国際」と訳した方

が「カッコいい」ということもあるのかも知れません。ちなみに「国際」は「国と国との交際」の略語。

今回の講演では日本シェイクスピア協会の表現を踏襲して「第5回国際シェイクスピア学会」とした。

資料3　World Shakespeare Bibliography

World Shakespeare Bibliography

Department of English
Texas A&M University
College Station, TX 77843-4227
409-845-3400

Editors:
Harrison T. Meserole
James L. Harner

19 September 1991

Takashi Sasaki
Chief Editor, Shakespeare News from Japan
1-30-4, Kitakase
Saiwai-ku, Kawasaki 211
Japan

Dear Mr. Sasaki,

Professor Meserole and I are indeed honored to have such eminent scholars as you and Professor Arai join the International Committee of Correspondents. We look forward to a long and mutually beneficial association.

I want to thank you for the copy of your Complete Catalogue of Shakespeare in Japan, which will find a welcome home in our working library. It is, indeed, an impressive bibliography and one that, I am certain, has been warmly received by Shakespearean scholars in Japan. I certainly urge you to publish this in English also. As you are well aware, too little Japanese scholarship is known in the West.

I also want to commend you on Shakespeare News from Japan, a much-needed survey that will help to introduce Japanese scholarship to a wider audience. We were able to use much of volume 1 for the 1990 World Shakespeare Bibliography, and we look forward to seeing volume 2.

I am sending, by book post, copies of the 1988 and 1989 World Shakespeare Bibliographies. As a member of the International Committee, you will receive a complimentary subscription to Shakespeare Quarterly (including the Bibliography issue).

I am enclosing a copy of my original letter to Professor Arai, since that includes information about our procedures. In addition, I am enclosing some instruction sheets that we provide to new members. However, as I told Professor Arai, we can use information in the form you provide in Shakespeare News from Japan.

Again, we are delighted to welcome such a distinguished bibliographer to the Committee.

Yours sincerely,

James L. Harner

James L. Harner
Editor
World Shakespeare Bibliography

世界のシェイクスピア研究と上演の最も詳細な情報を提供しているのが、ワシントンの The Folger Shakespeare Library （フォルジャー・シェイクスピア・ライブラリー）が 1950 年から発行している Shakespeare Quarterly（『シェイクスピア・クォータリー』）の別冊、World Shakespeare Bibliography（『ワールド・シェイクスピア・ビブリオグラフィー』である。

佐々木が編集主幹を務める英文年報 *Shakespeare News From Japan*

を第5回国際シェイクスピア学会（8月）で無料配布したが、当時はまだインターネットが普及しておらず、約1ケ月後に英文レターが届いた。1991年以降、ワールド・シェイクスピア・ビブリオグラフィー国際委員（日本代表）として情報を発信している。上記のいきさつは荒井良雄編『シェイクスピア大事典』（日本図書センター、2002年10月）に掲載されている。

おわりに

阿佐ヶ谷ワークショップの講演「第5回国際シェイクスピア学会東京大会が残したもの」(2015年11月21日)を無事にまとめることができた。2016年、シェイクスピア没後400年という記念すべき年にこれまで活字化してなかったものをひとつの形にできたことはうれしい限りだ。

荒井良雄先生はかつて「今できることをしましょう」を合言葉に、研究に導いて戴いた。先生から戴いた宿題はあまりにも多く、とてもすぐにはその課題を提出することはできない。あと何年かかるかはわからないが、ひとつひとつ発表していきたいと思う。

著者略歴

佐々木 隆(b.1960)

博士(英文学)（駒澤大学）。現在、武蔵野学院大学副学長、武蔵野学院大学大学院国際コミュニケーション研究科長・教授、武蔵野学院大学国際コミュニケーション学部教授。早稲田大学演劇博物館招聘研究員。日欧比較文化研究会会長、比較文化史学会理事、日本英語文化学会理事、日本シェイクスピア協会会員、World Shakespeare Bibliography国際委員日本代表、他。

おもな著書・共著

『日本のシェイクスピア』（エルピス、昭和63年）、『日本シェイクスピア総覧』（エルピス、平成2年）、『日本シェイクスピア総覧２』（エルピス、平成7年）、『シェイクスピア研究資料集成』（全30巻＋別巻２、日本図書センター、平成9年～平成10年）、（共著）『シェイクスピア大事典』（日本図書センター、平成14年）『CD-ROM版日本シェイクスピア総覧』（エルピス、平成17年）、『日本シェイクスピア研究書誌(平成編）』（イーコン、平成21年）、『日本シェイクスピア研究書誌（江戸時代編）』（イーコン、平成25年）、『江戸時代のシェイクスピア受容』（イーコン、平成25年）、『日本シェイクスピア研究書誌(平成編）（増補版）』（イーコン、平成26年）、『日本シェイクスピア劇上演年表』(多生堂、平成27年）、『日本シェイクスピア劇上演年表(増補改訂版）』（多生堂、平成28年）他

著　者　佐々木　　隆

発行日　平成28年9月1日

発行所　武蔵野学院大学　佐々木隆研究室

〒350－1328　埼玉県狭山市広瀬台3－26－1

TEL 04(2954)6132/FAX 04(2954)6134

All RIGHTS RESERVED@TAKASHI SASAKI